

〔研究ノート〕

漢詩唱和を通しての近代日中文人交流

——井上哲次郎、潘飛声、関桂林を中心に——

龔 穎

はじめに

二〇二〇年の年初以来、コロナ感染症の伝播による影響が当初の予測よりかなり長引き、全世界範囲でその被害を受けているところである。経済面での不振などと比べると、疫病退治の諸措置(例えば、隔離、都市封鎖など)が取られたために、人と人との間に新たな「壁」つまり隔たりが生じてくることが益々懸念されるようになってきた。よって、本稿では、明治二十年代つまり十九世紀八十年代後期に始まる日中人物交流の一例を掘り出し、その交流の一端を明らかにすることを目標とする。

近現代日本哲学史・思想史を考える際に、元東京大学哲学科教授である井上哲次郎(一八五五―一九四四)は避けて通れない人物である。彼はドイツ哲学の日本への導入につとめながら、ドイツ観念論と伝統を持つ仏教とを結合して「現象即實在論」を主張し、日本のアカデミズム哲学の基本性格を決定づけた。これのみならず、井上哲次郎は政府の支持を得ながら、社会活動や国民道德教育などにも熱心に参与し、明治・大正・昭和三大時期

を経ながら、日本哲学会を創立し、またその会長も長く務めた。井上の道德教育論などは当時の日本のみならず、中国や韓国を含む東アジア社会に大きな影響を及ぼした。

井上道德教育論の近代中国における受容と変容の実情を明らかにするため、筆者も二〇一四年発行された『倫理研究所紀要 第二十三号』に「明治日本の道德教科書と近代中国——井上著道德教科書と蔡元培『中学修身教科書』について」という題で拙論を書かせてもらった。この論文を執筆するために資料調査を行ったが、その際、井上のドイツ留学時代の後半期に、ベルリンに居合わせた中国文人との交流・交遊の史料に興味を覚えた。本稿では井上のドイツ留学の日記を手掛かりにしながら、この交流の発端、経緯とその特色を探ってみたいと思う。

一、ベルリン大学付属東洋語学校にての出会い

(1) 井上哲次郎の場合

まず、井上哲次郎の略歴とそのドイツ留学について、ごく簡単に説明してみよう。

井上哲次郎は筑前国太宰府に生まれ、旧姓を船越といい後に井上鉄英の養子となる。号は巽軒（そんけん）、字を君迪と称した。少年哲次郎は、当時において有名な儒者である中村徳山主催の漢学塾に入れられ、漢文漢詩作りの訓練を受けていた。後、一八六八（明治元）年十三歳の時、博多に出て村上研次郎について英語を学び、続いて長崎の広運館に入学し、そこでアメリカ人教師について西洋学を学んだ。一八七五年、東京開成学校に入学するが、二年後（明治十年）学校制度の変更により創設された東京大学に入学し、哲学及び政治学を専攻。一八八〇年に第一期生として卒業した。東京大学では、井上はドイツ哲学やスペンサーの社会進化論を学んだ。卒